



1

サイレント・エコー コレクション展I・II

コレクション展I：2011.4.29-7.18 コレクション展II：2011.9.17-2012.4.8

アメリカ南部出身の小説家カーソン・マッカーラーズの小説『心は孤独な狩人』で語られる音楽観¹⁾、人と音楽の世界と深く共鳴し合うルクセンブルグ出身のツェ・スーメイの《エコー》を招きいれ、本展では金沢21世紀美術館のコレクションに潜在する未だ語られたことのない造形芸術の展覧を試みた。《エコー》で提示される、身体、音、技術、自己をとりまくあらゆる事象との関わりや融合から生み出される世界を根底に据え、自己、技術、対象の十全な融合によってこそ作り出される造形芸術の世界を紹介した。この試みは、「工芸的造形」という概念をめぐって近年展開されてきた視座を起点としている。「素材／自然／環境／他者に寄り添い、自らを物事の生成のプロセスに投げ入れ、親密な交流を図ることによって、固有の技術を見いだしつつ新しいかたちを生み出す造形及び造形行為」²⁾という美術表現を評価する新しい

眼差しに依り、アニッシュ・カプーア、田中信行、杉本博司、藤井一範、ヴィック・ムニーズ、ツェ・スーメイ、アン・ウィルソン、マーティン・スミス、ジュゼッペ・ペノーネ、中川幸夫、マシュー・バーニー、栗津潔、山崎つる子、久世建二、角永和夫による、自己、他者、素材といったあらゆるものとの対話の営みを検証した。

特に「コレクション展II」では「サイレント・エコー」の概念を実験的に検証する試みがなされた。展示室2では栗津潔による映像作品《ピアノノ炎上》、《風流》、《コンポジション》とともに、1台のピアノが置かれている。映し出されるイメージを観た人が、それぞれ自分のなかに沸き起こる感興をこのピアノによって音にして映像に重ね、固有の時空を紡ぎ出した。栗津によるイメージと、ひとりひとりが奏でる音によって、この展示空間は常に変化し続けた。「創る側と、見る側の境界は始めからない。あるのは個々人の差異

だけである」という栗津潔の芸術思想を提示する空間となった。

展示室3の《ブリキのたくらみ》は、山崎つる子のライブペインティングによって実現された。山崎は半世紀以上にわたり独自の表現を切り開いてきたが、ブリキという独特の反射性を持つ素材によって展開される作品群は、「見る」ことの意味を探究してきた作家にとって極めて重要である。展覧会オープン時には真新しいブリキ板10枚が展示壁に並んでいたが、会期中作家がこのブリキと対峙し、新しい絵画世界を生み出した。鑑賞者は、会期はじめには、本作品を前に自らのぼんやりと映る姿を目にしていたが、作家のライブ・ペインティング後は、色と光と影によって生み出された像、そしてその合間に自らの姿を見ることになる。こうした変貌するという、独特の時空が《ブリキのたくらみ》によって創出された。



2



3



4



5



6

展示室6では角永和夫による《SILK》プロジェクトが実現された。展示室には角永が考案したシステムによって天地の逆転が可能な9メートル×15メートルの巨大な網が設置され、このネットに新潟の蚕農家の手で育てられた蚕二万頭が放たれた。蚕の上方へ昇る習性を生かして、作家は1日に数回ネットの天地を回転させた。作家の介入はこの行為のみであり、無数の蚕が三日三晩かけて広大な平面繭によって作品《SILK》が生み出された。

蚕の約半数は途中で力つきて息絶えてしまう。生き残った半数の蚕のなかには蛹になり、成虫になるものもいるが、仮にその成虫が交尾して雌が卵を産み、その卵が孵ることがあったとしても次の世代に生きる力はないという。人間が5千年の時をかけて人工的に改造したこの生き物は極めて弱く、一代限りという宿命を負っている。そんな命を桑の木のもとに還して見送るまでもが《SILK》プロジェクトであったが、本プロジェクトは造形行為の意味のみならず、人間の営み、自然の営みのあり様をも、21世紀を生きる我々に問いかけるものであり、「サイレント・エコー」というテーマを特に照射するものとなった。

(村田大輔)

*1. 本展ではカーソン・マッカーレス『心は孤独な狩人』による次の下りを引用した。「どうしたというのだろうか?音楽はためらうように、うねりながらはじまった。散策か行進のように。夜の世界を歩む神のように。ミックの外の世界はにわかに凍りつき、音楽のあのすべり出しの部分だけが、胸の中で赤く燃えていた。そのあとの音楽は耳にもはいらず、彼女はただ拳を固く握りしめ、凍りついたようにすわったまま待ち受けていた。しばらくすると、音楽はふたたびはげしく、声高にうたいだした。もはや神とは何の関係もなかった。これこそミックであり、昼日中を歩むミック、夜をただひとり歩くミック・ケリーだった。・・・この音楽は彼女であり、ほんとうの、ありのままのミック自身であった。」(カーソン・マッカーレス、河野一郎訳『心は孤独な狩人』新潮社、1972年、pp.147-148)

*2. 不動美里「生成のプロセスの只中にあるもの」『Alternative Paradise ～もうひとつの楽園』金沢21世紀美術館、2005年、pp.8-11。近年の工芸的造形論の展開については、村田大輔「ロン・ミュエック—対話—とかたち」(『ロン・ミュエック』フォイル、2008年)、「反重力構造—『歴史の歴史』—とかたち」(『杉本博司—歴史の歴史』新素材研究所、2008年)、「『ニトカフェ・イン・マイルーム』とかたち」(『広瀬光治と西山美奈の“ニトカフェ・イン・マイルーム”』金沢21世紀美術館、2009年)、「What would Hiroshi Sugimoto Do? What would Museums do? Deified Artist and Museum Hiroshi Sugimoto's "History of History"」(AAS-ISS Joint Conference, 2011年、<https://www.asian-studies.org/Conference/index.htm>)を参照されたい。

1. ツェ・スーメイ《エコー》2003年
4分54秒ループ ヴィデオ・プロジェクション、音
2. ツェ・スーメイ《ヤドリギ楽譜》2006年
6分49秒ループ ヴィデオ・プロジェクション、音
3. 展示室7: 展示風景
(左) 田中信行《Inner side - Outer side》2005年
漆、麻布(乾漆)
(右) 杉本博司《日本海 礼文島》1996年
ゼラチン・シルバー・プリント
4. 展示室8: 展示風景
(手前) 藤井一範《爆—転生》1999年 陶土
(奥) ヴィック・ムニーズ《ピクチャー・オブ・チョコレート: ダイバー (シスキンドにならって)》1997年
チバクローム・プリント
5. 展示室11: 展示風景
(手前) 中川幸夫《聖なる書》1994年(2004年プリント)
Cプリント(カーネーション、自作ガラス)
(中央) ジュゼッペ・ベノーネ《伝播》1995-1997年
バラフィン、ガラス、紙、インク、アクリル、水
(奥) 中川幸夫《無題(花染)》1984年
花液、種子/画仙紙
6. 展示室11前: 展示風景
マーティン・スミス《構造の漂流》2002年 陶器

1-6. 金沢21世紀美術館蔵

1.2. © TSE Su-Mei

3-6. Photo: SUEMASA Mareo